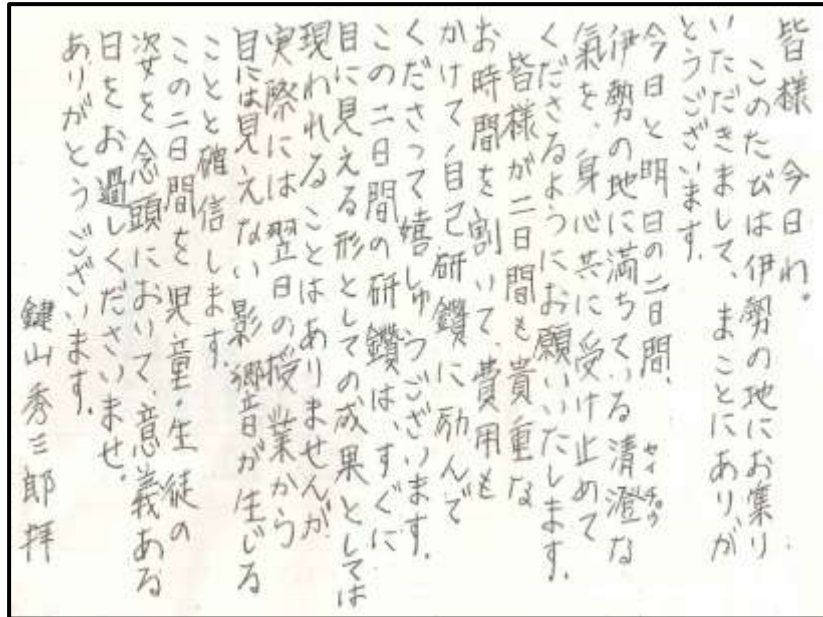


取り戻そう 美しい国と日本人の誇りを

0. 心構え



「我々は何のために学ぶのか」。すべては鍵山先生のこの文章に詰まっているのではないのでしょうか。

「研鑽は、すぐに目に見える形としての成果としては現れることはありませんが、

実際には翌日の授業から目に見えない影響が生じることを確信します。」

とありますが、鍵山先生は我々教師に大きな期待を寄せておられることが伝わってきます。なぜなら、我々のすべてが児童・生徒に影響を与え、そして後に彼らが日本社会を背負って立つからです。美しい日本を取り戻すには、教育しかない。その第一線にいる我々の思いこそが、これからの日本を左右する。まだ療養が必要な中で、無理をしてまで書かれたこのひと文字ひと文字の重み。こうやって祈っていただいているからこそ、生まれてくる覚悟と責任。それらを胸に抱きながら講習がスタート致しました。

1. トイレ掃除

リーダーとは先を見て、誰をどこに配置するか瞬時に判断する。(田中会長)

サブリーダーはタイムマネジメントをするのがよい。(千種さん)

最初に木田先生から、道具の説明をいただきました。スポンジ、ナイロンタワシ、サウンドメッシュの使い分けやスポンジ、タワシを大切に使うためにどうすれば良いかを丁寧にお話いただきました。さらに、その裏側に児童・生徒の存在があることを忘れぬようにトイレ掃除の目的を確認いただきました。

五十鈴川中学校のトイレは一見きれいで、掃除をしなくてもいいのではないかと思います状態でした。しかし、尿こしを開けてみると裏にはべっとりとした汚れがついている。外見だけの判断では、過ちを犯してしまうことを体験させていただきました。また壁や床もきれいなようで、角度を変えてみてみると、汚れが浮かんで見えてきます。



生徒も同じで、いつも同じ方向ばかりから見てみると、悪いところばかりが見えてしまいますが、角度を変えてみると、見え方が変わってくる。つまりは、生徒を変えるのではなく、自分が変わることで生徒の見え方が変わってくるというとても大事なことを教えていただきました。

掃除に取り組まれる皆様は、一心不乱にトイレに向かわれ、無言の中にトイレを磨く「シュッシュッ」という音だけが響き渡り、またその音が空気を磨き、その空間を凜とした雰囲気に変えていきました。



「空気を変える」には、良いことに対して一心不乱に取り組むことだと気付かせていただき、このことは誰にでもできることだと改めて感じる事ができました。生徒と向き合う中で、「私には無理だ」と思うことはよくあることですが、「できる」とか「無理だ」と思う前に、ただ目の前の生徒に対して一生懸命に取り組むことができるだけで、空気は変えることができる。逆に言えば、不穏な空気はもしかしたら自分自身の弱さが醸し出しているのではないかと思わせてくれるトイレ掃除となりました。



トイレ掃除を終えてからは、各班で気付きの発表。初めての方や熟練者がいる中での発表会は、それぞれに新鮮な思いを味わい、明日への活力をいただく貴重な時間となりました。まだ鍵山教師塾が始まって数時間しか経っていないのに、すでに充実感いっぱいトイレ掃除となりました。

2. 開講式

はき物は 足でそろえて 手でそろえて 心でそろえる
かたち
型が心を正し、心が型を美しくする

寺岡先生より、型を教えてくださいました。正しい静座、礼、立ち方、足の崩し方…。すべての基本は左から。こういった型が心を正し、常に正しくいようとする心が型を美しくしてくれます。学んでいる間は意識するのですが、学び終わると元に戻ってしまうことはよくあることです。こういったことこそ、毎日実践をし、型を作ることが大事なのではないのでしょうか。

武田先生には、お一人ずつ名前を呼んでいただき、受け入れていただきました。自分の名前には、自分の祖先の思いと祈りが詰まっている。初めて修養団に参加したとき、中山靖雄先生に名前を呼んでいただき、なぜか涙が溢れ出したことをいつも思い出す。すべてを受け止めていただける温かさがあるから、また前に進む勇気をいただける。こんなことを感じながら、今回も名前を呼んでいただき、大きな声で返事をさせていただきました。



3. 池間哲郎先生ご講話

【第一部 国際協力の現場から】 自国を愛せぬ者は、国際協力はできない

ミャンマー

世界では11億の人が泥水を飲んでおり、衛生状態が悪いので、15秒に1人の割合で亡くなっている。そんな生活の中、ミャンマーやネパールの子は幼いときに我慢すること・辛抱することを覚えるので、2時間でも話が聴ける。家事は子どもがやることだと思っている国がほとんどである。しかし、両親を尊敬すると答えるのは、日本では25%なのに対し、他国では8~9割という結果。いかに幼い頃の家庭の教育が大事かが分かった。



またハンセン病患者に対して、差別と偏見で、隔離されている。餓死寸前では表情がなくなり、こういう人には食料援助が一番必要である。そうすると、恋愛もし、笑顔が増えるのである。そして、世界で一人でも自分のことを思ってくれる人がいたら生きようと思うようになるのである。

ラオス

不発弾が多く、そのせいで手足を吹き飛ばされることも頻繁に起こってしまう。また一日一食で栄養状態が悪く、野生に生えているタケノコだけで1ヶ月過ごす人もいるような状態なので、風邪をひいて死んでしまうことが多くある。これは日本では全く考えられないことで、日本人は栄養がいっぱいあり、病気と戦う力があるので、風邪で死ぬことはないであろう。生きることが確保できれば、次は絶対に教育であると池間先生からメッセージをいただいた。

カンボジア

ポルポトの政策により、800万人が600万になった。子どもが母親を捕まえてきて、ピストルで撃たせるなど残虐なことも多くあった。また地雷が残っている地域が多くあり、戦争が終わっても苦しみ続けられている。そんな中、ある少年に「あなたの夢は何ですか」と聴くと「夢なんて見たことがない」という答えが帰ってきた。15歳まで生きるのは3名に1人程度の割合である。

だから彼らにとって、日本はモデル国である。原爆を二つも落とされ、今のカンボジアよりもっとひどい状況なのに、いまや大きな発展を遂げており、「日本を見てごらん」とよく言うようである。

タイ

貧しいからお寺に預けて、親と別れるのだが、親と会えないからすごく淋しい顔をする。他国でゴミの中で生活している子どもでも近くに親がいるので、笑顔でいられる。子どもにとって、親の存在がいかに大きいか分かるエピソードである。

フィリピン

3万人がゴミの中に住んでいる。

少女に「あなたの夢は何ですか」と聴くと「大人になるまで生きること」と答えた。

池間先生からのメッセージ

- ・逃げ出したい49%、何とかしたい51%の割合。100%で取り組んでいるわけではない。
- ・やりたいこと1%のためにやりたくないことを99%徹底してやっている。
- ・過保護は暴力よりも人を苦しめる。(感謝を知らないから)
- ・ありがたいの反対は当たり前(感謝できなければ幸せを感じない)
- ・愛情には厳しさが伴う。
- ・職員には「知る」「わかる」「尊敬する」を徹底している。「あげる」ではなく「わかる」。満ち足りているわけではないが、それでも分ける気持ちが大事。
- ・最も大事なボランティアは一生懸命に生きること。

【第二部 植民地政策】

沖縄で育った池間先生は、異民族に支配される苦しさを味わう。米兵が人を殺しても婦女暴行でも罪にならない。そんな状況を目の当たりにしながら少年時代を過ごされた。この体験が国際協力のベースになっているそうだ。

ベルギー

コンゴを支配。コンゴの人を奴隷とし、仕事を失敗したら手首を切り落とした。さらには、家族を人質にとり、ノルマを達成できなければ、子どもの手足を切り落とすという残虐なことを行っていた。

アメリカ

自由と開拓の国と言われているが、実際は侵略と残虐の国。原住民インディアンは元来、誇り高く、勤勉で、愛がある民族であったが、その8割を殺した。KKK、赤い夏、リトルロック高校事件に代表されるように、有色人種は人間ではないと思われており、ひどい人種差別が行われていた。キング牧師の力により、黒人にも人権が与えられるようになったが、人々の心の中の差別心を取り除くには、まだまだ時間がかかった。

オーストラリア

白豪主義を唱え、アボリジニを追い詰め、人間狩りを楽しむかのように殺していった。またオーストラリアの軍隊は日本の捕虜を、空からほかしたという話もある。

イギリス

紳士の国と言われているが、本当にそうなのだろうか。インドを侵略し、土地を奪い、餓死で大勢の方が亡くなった。植民地となった現地の人を「家畜と思え」と言われていた。そのイギリスがやったことは以下の通り。

1. 間接統治…恨みは白人ではなく、華僑や少数民族にいくようにした。
2. 文盲政策
3. 改宗者重用
4. 混血児重用…白人の血が残るようにした。
5. 民族分断…わざとけんかさせるようにした。
6. 一切の集会禁止
7. 標準語阻止
8. プランテーション…強制裁培(お茶、コーヒー、綿花)

日本

日本は植民地にならなかった。日露戦争にも勝利。1919年パリにて、人種差別撤廃提案を示したが、イギリス、アメリカの猛反対にあい、否決された。国際会議において人種差別撤廃を明確に主張した国は日本が世界で最初である。

大東亜戦争敗戦後、戦犯扱いされるが、昭和天皇は戦争をやってはいけないと動いていた。

池間先生からのメッセージ

- ・戦争は5対5。10対0で、どちらかが一方的に悪いというわけではない。
- ・日本人がいかに素晴らしいかを知ってもらいたい
- ・偏った情報に左右されず、勉強をし、自分の考えを持つことが大事である。

【第三部 先人の日本人達】

大東亜戦争敗戦後、WGIPに基づいて、日本人の自信と誇りを奪い取る洗脳計画が始まった。

※WGIP…War Guilt Information Program の略。簡単に言うと、GHQによる日本占領政策の一環として行われた「戦争についての罪悪感を日本人の心に植えつけるための宣伝計画」である。戦争は軍事戦、政治戦、心理戦に分けられる。政治戦とは政治的手段によって、心理戦とはプロパガンダや情報操作によって、相手国やその国民をしたがわせようとするものである。

これにより、教育が破壊され、6・3・3制が導入され、神話教育も破壊された。今までは神社で集まることも多かったが、神社を破壊し、逆に公民館を増やして、神話教育をなくす動きが起こった。その結果、日本青少年研究所のデータによると、日本人の自尊感情は低くなっていると言われている。実際、政治・経済に関しては、アメリカだけでコントロールができていないので、日本の政治・経済にアメリカの影響が大きくあるが、教育に関してアメリカから口を出すことはない。これは、アメリカの思う通りになっている証拠である。

しかし、本当にこの数値の通り、日本人が悪いことをして、自分たちを責めなければならないのだろうか。それをどう考えるか、戦時中の先人の海外での行為を通して、大切なことを教えていただいた。

パラオ

1919年に日本が統治をした。今まで他国にやられていたように、奴隷のように扱われるのだろうと思っていたが、先人の日本人は、非常に親切に対応してくれた。そして、学校・病院・道路などのインフラを整備してくれた。特に教育では、日本から来た先生が素晴らしかった。親身になり、そして厳しく教育してくれたおかげで、今でも日本の歌を歌い、花札で遊ぶ人が多くいるなど教育の大切さを表すエピソードが多く残っている。その日本の先生から教えていただいた中で軸となる精神が「責任感」。パラオでは、今もこれを受け継ぎ、親から子へ教育が行われている。

ペリリュー島の戦い

このペリリュー島では、大東亜戦争末期に、日米両軍によって実に73日間にも亘る死闘が繰り返された。米軍は、日本軍の兵力の約4倍・航空機200倍・戦車10倍・重火砲100倍以上の軍事力であり、島民たちは日本を尊敬していたので、大人も子供も日本軍と一緒に戦う決意をしており、そのことを中川州男大佐に伝えた。すると、中川は彼らに対して、「帝国軍人が貴様ら土人と一緒に戦えるか」と言い放ち、島民達は裏切られた想いで、皆悔し涙を流した。そして空襲を避けるため夜に行われた強制疎開。日本兵は誰一

人見送りに来ない。悲しみと悔しさに打ちのめされた村の若者達は、悄然と船に乗り込んだ。しかし、船が島を離れた瞬間、日本兵全員が浜に走り出てきた。そして一緒に歌った日本の歌を歌いながら、手を振って彼らを見送った。先頭には笑顔で手を振る中川がいた。その後、戦闘が終局に達し、生き残った日本将兵はわずか60人足らずとなり、ついに、日本軍総司令部陣地の兵力弾薬もほとんど底をついたために、司令部は玉砕を決定した。しかし、ペリリュー島で、壮絶で長い戦闘が繰り返されたにもかかわらず、ペリリュー島の民間人には、ただの1人の犠牲者もでなかった。

アンガウルの戦い

昭和19年10月19日、そのアンガウル島で最後の突撃間際に島民と松澤豊中尉(砲兵第二中隊小隊長、長野県出身)の間で交わされた会話がある。

島民 「わたしたちも一緒に戦わせて欲しい」

松澤中尉「皆さんは日本人でないのに今までよく協力してくれました。我々軍人は祖国日本の為に死なねばなりません。皆さんはその必要はありませんから投降して米軍の保護を受けなさい。これは後藤隊長の厳命です」

米軍による投降勧告は9/25以降続けられていたが、10月に入り、松澤中尉のすすめなどあり、今まで糧秣搬送、陣地監視に協力していた島民の投降が出てきた。10/9まで168名(栄養失調150名)が投降した。

このようなことを池間先生から教わりました。池間先生のお話を伺う前と後では、日本を見る目が180°変わりました。真珠湾への奇襲、従軍慰安婦、戦争責任など、戦前の日本人がいかに愚かで罪だったかを青年期に教わり、それを疑うこともなく育ちましたが、いかに先人の日本人が素晴らしく、人間性に溢れていたかを感じることができました。日本人、外国人という物理的な差ではなく、その場所で共に生活をし、共に過ごしたことを大切にする日本人の姿、そして和を大切にする日本人の心意気は、確かに我々の血の中に流れており、日本に生まれたことを誇りに思いました。他国に比べ、自尊感情が低いと言われていますが、こういった先人のスピリッツを伝承していくことで、自尊感情は高まっていくのではないのでしょうか。戦争の話=軍国主義と言われそうで、足踏みをしてしまう雰囲気はどこかにありますが、そんなちっぽけな偏見で、先人の思いを踏みにじってはいけません。そんなことを感じながら、日々の教育活動に対して、本気で取り組む覚悟をいただきました。

4. 水行準備、反省行、水行

五十鈴川 清き流れの すえ汲みて 心洗え 秋津島人
苦しいから逃げるのではなく、逃げるから苦しいのである



大講堂には「流汗鍛錬」の文字と「同胞相愛」の文字が掲げてあります。水行準備と反省行で、この2つを体感させていただきました。水行準備では、舟こぎ体操をはじめ、その所作を教えていただきながら、「流汗鍛錬」の意味を感じました。準備が進むにつれて、不安が消え、そして勇気をいただき、力強く前に進んでいきたい、強い自分でいたいと思うようになりました。

打って変わって反省行では、自分を掘り下げていきました。掘り下げていくと、自分の大切なものと出会っていきます。自

分の両親であり、妻であり、子どもが浮かんできました。自分を常に支えてくれている人の愛を感じ、温かで包み込まれるような感覚を抱き、これこそが「同胞相愛」なんだと感じました。家族以外にも療養中の鍵山秀三郎相談役や中山靖雄先生など、多くの方の温かい祈りがもっと深いところにあり、自分が生かされていることを感じました。

この両方に気付き、両方の準備があるからこそ、水行の真髓が味わえるのでしょう。実際に今年の水行は、今までにない感覚を味わいました。何十年に一度の寒波が来たからではありません。きっとトイレ掃除から始まり、池間先生のお話を聞いた上で水行だったために、感じ方が違ったのだと思います。修養団の前で整列をし、三列で進んでいくときの雰囲気は、まさに一体感があり、肚を決めた者しか出せない雰囲気がありました。そして舟こぎ体操、流汗鍛錬のかけ声。幾度となく戦いを繰り返した日本の武士や若者達の戦場に向かう思いを推測しながら、そしてそれに自分の魂を乗り移していくような感覚は、やった者にしか味わえないものでした。「動」と「静」の絶妙な切り替えに酔いながら、我を鼓舞する自分と内から出てくる温かさを感じることができました。その内から出てくるものは、自分の思いであり、先人の思いであり、まわりからの期待であり、祈りであったように思います。そうしたときに、水の冷たさは消え、研ぎ澄まされていく感覚がありました。今までの水行は、「自分との戦い」という感じでしたが、今回は「先人の思いに触れる」ことができ、言葉では言い表せない感覚を味わうことができました。



5. 静座行、神宮正式参拝

か が み → 「か」 がとれて「かみ」になる

氏名→使命であり、人は必ず役割を持って生まれてくる

静座行では、新たな自分と出会います。前日に、水行を行い、そこで感じたものを、一晩寝かした上で、もう一度何が大事かを確認すると共に、水行を終えた新しい自分との対話を楽しみます。そこに足のしびれ・痛みが混じり、邪念が入ってきそうになる「善」と「悪」の葛藤も、この静座行の醍醐味なのでしょう。

それを終えての正式参拝。いつも以上に空気に力が宿っている感覚を感じました。巷では「パワースポット」などと軽い表現をしていますが、決してそんな軽いものではなく、魂が呼応するような、そして血液が気持ちよく流れるような不思議な感覚をいただきました。何百年も神宮を守り続ける木々のささやき、玉石の音、五十鈴川の流れから来る絶妙のバランスが魂を呼び



起こしてくれました。「風を起こす」という言葉が今回の講習で何度か聴きましたが、まさに風を感じ、自然の壮大さを感じました。そういった自分の気持ちを朝日が応援してくれるかのように、これもまた絶妙のタイミングで、我々を照らしてくれました。「一隅を照らす」の詩のように、我々が我が身を燃やして、暗きを照らし、日本を照らし、この世をみちびく国宝とならんという決意を持たせていただきました。



6. 寺岡賢先生ご講話

「美しい日本の心」

みんな仲良く助け合い

サモワでの話 自衛隊と一緒に働くと、みんなイキイキ。多国籍軍と働くと、イヤイヤ。

自衛隊は、17時になると、「帰ってください。後はこちらでやりますから」

多国籍軍は、17時になると「帰ります。あと、やっておいて」

派遣がいいか悪いかは報道されるが、派遣で感謝されていることは、報道されない。

国際交流の前に、自分の国のことを知れ

何年も生きているのに自国のことを分らない人が、人の国に少しいたぐらいで何がわかるのか。

だから、日本人としての考え方・生き方を知り、日常から実践することが大切である。

先祖の血 みんな集めて 子は産まれ

遡っていけば、天皇ともつながっており、その祖先の天照大神ともつながっている。

三種の神器と言われる「鏡 剣 玉」はすべて磨くもの。

つまりは、「自分を磨き、徳でもっておさめよ」



世直しは余直しである

「子どもは親の鏡である」と常に言い聞かせたのは天皇であり、天皇はその責任を国民に問うのではなく、常に自分自身に問いかけておられる。

中山靖雄先生も生前「子どもの非行は親の責任」と言っておられた。

正しいことを正しいというのは誰にでも言えるが、すべてを受け入れられるかができるかどうか。それが懐の深さとなる。

損か得か

徳か不徳か どちらの「とく」を選ぶか。

日本を高徳の国にしていこう。

いやしくも おおみたから 民 くぼさ に利 ひじり あらば 何ぞ わざ 聖の 造にたがわむ

皇室では国民のことを「おおみたから」と呼ぶ。

国民のためになるなら、上に立つ者は何があってもそれをしなければならない。

リーダーとは、弱い人・後に続く人を何としてでも守り、次の人の道しるべになるべきである。

日本には婦道というものがあつたが、戦後、宗教心・道徳・歴史を奪われ、骨抜きにされた。

よしあしの 中を流れて 清水かな

よしあしは、「善し悪し」とも書ける。良い部分と悪い部分を通るから、磨かれていくという意。

過去が咲いている今 未来のつぼみでいっぱい今

今は過去の連続であり、今の連続が未来となる。だから今日という日をどう生きるか。

偶然の偶然は必然である。

病気をするのは優しくなるため 事故に遭うのは謙虚になるため

思いは選べる。こういった苦しいことに出会ったときに、このようになれるように心の中に置いておく。

今ここに起こりし事は 総てみな 御祖の愛の 仕込みなりけり

今、ここに起こることは、すべて親の親（先祖）の愛のつながり、仕込みである。

苦をよろこぼう 苦をいただいでいこう

数字は、九（苦）を通過して、十になる。

みな借金を抱えて生きている。それを消すために九（苦）があり、十となる。

だから、みがく＝身が苦。

ありがとうの反対は当たり前である

目の前にいる人、足元にあるものを大切にできることが大切である。

総てを感謝し、常によろこび、絶えず祈る

感謝という名の帆を常に立てておけば、物事に風が吹いたときに、正しい方向に進むことができる。

正しいというのは、人によっても違うし、時代によっても違う。だからすべてを受け止める器が大切であり、それが感謝である。

なぜなにどうして言うでない

見るには見せる意味がある

聴くには聴かせる訳がある

見るのも因縁

聴くのも因縁

会うには出会う意味がある

「出会いを通して、自分に出会う」

「人間は一生のうちに逢うべき人に必ず逢える。

しかも、一瞬早すぎず、一瞬遅すぎず」

中山靖雄先生や森信三先生とだぶるお言葉をいただいた。

瑞穂の国はイネからはじまる

我々が毎日食べている米は神話の時代に神の命と引き換えにもたらされ、天照大神が民に授けたものである。戦後、天皇はマッカーサーに会いたいとお願いをした。マッカーサーは命乞いをしにくるのだろうと予測していたが、天皇は「一切自分の責任である。私の命は授ける代わりに、国民に援助の手を差し延べてほしい」と懇願した。昨年起こった広島土砂災害や5年前の東日本大震災の際も、被災地を訪問し、国民一人ひとりのことを思い、声をかけに行かれた。

藤井一少佐

藤井中尉は茨城県の農家に生まれた。7人兄弟の長男であった。陸軍に志願し、歩兵となったが、特別に優秀であったため転科して陸軍航空士官学校に入校した。卒業後、熊谷陸軍飛行学校に赴任し、中隊長として少年飛行兵に精神訓育を行っていた。

精神訓育とは生徒達に、軍人勅諭に沿った軍人精神をたたき込む重要な鍛錬であった。

忠誠心が強く熱血漢の藤井中隊長は、厳しい教官であるとともに、心根が優しく、生徒たちから慕われていた。藤井中尉は特攻作戦が実施される前から「事あらば敵陣に、あるいは敵艦に自爆せよ、中隊長もかならず行く」と繰り返し言っていた。

その後、特攻作戦が開始され、自分の教え子たちが教えのとおり特攻出撃していく事となってしまった。あの純粋な教え子たちが次から次へと特攻出撃していく中、責任感が強く熱血漢であった藤井中尉は自分だ

けが安全な任務をしていることに堪えられなかった。

「自分の教えを守って、次々と将来ある純粋な教え子たちが毎日、敵艦に突っ込んで行く。あいつも、あいつも……。俺はいつまでこんなことをしているのか」

なんと、藤井中尉は教え子たちとの約束を果たすべく自らも特攻に志願したのである。

しかし、妻と幼子二人をかかえ、学校でも重要な職務を担当しており、支那事変（日中戦争）で迫撃砲の破片を受けた左腕の為にパイロットにはなれなかった藤井中尉は、当然、志願が受け入れられるはずもなかった。さらには学校を仕切っている重要な任務を離れられては困るからであった。しかし、藤井中尉は生徒達との約束を守るため、断られても、断られても二度までも特攻に志願していた。

藤井中尉の妻、福子さんは高崎の商家に生まれ、お嬢さんとして育った。戦争中は野戦看護婦として活躍していた。そもそも藤井中尉との出会いは、支那で負傷した藤井中尉の世話をしたのが福子さんであったということである。このような馴れ初めである。

福子さんは当然、藤井中尉の性格や考えが十分過ぎるほど解っていた。

しかし、解っているからといって特攻の許可さえ出ない人が、特攻志願することに納得できるものではない。

福子さんは夫を説得しようと必死だった。妻として二人の幼子の母として哀願もした。子供を盾にまでして必死に戦った。しかし、藤井中尉の決意は最後まで変わらなかった。

夫の決意を知った福子さんは、二人の幼子を連れて飛行学校の近くにある荒川（埼玉県）に入水自殺した。

翌日の昭和19年12月15日早朝、晴れ着を着せた次女千恵子ちゃん（1歳）をおんぶし、長女一子ちゃん（3歳）の手と自分の手をひもで結んだ3人の痛ましい遺体が近所の住人によって発見された。

すぐに遺体が藤井中尉の妻と子供であることが判明、熊谷飛行学校に連絡された。

知らせを受けた藤井中尉は、同僚の鳴田准尉といっしょに警察の車で現場に駆けつけた。車の中で、藤井は、「俺は、今日は涙を流すかも知れない。今日だけはかんべんしてくれ、解ってくれ」と、呻（うめ）くような声で言った。

鳴田には、慰めの言葉は見つからなかった。

師走の荒川の河川敷は、凍てついた風が容赦なく吹きつける。歯が噛み合わないほどに寒い。

凍てついた川の流れの中を一昼夜も漂っていた母子三人の遺体は、福子の最後の願いを物語るように、三人いっしょに紐で結ばれたまま、蟻（ひな）人形のように仲良さげに並んでいた。

その遺書には「私たちがいたのでは後顧の憂いになり、思う存分の活躍ができないでしょうから、一足お先に逝って待っています」という意味のことが書かれていた。福子、24歳であった。

凍てつくような12月の荒川の川べり、変わり果てた愛する妻と子供たちの姿を見て、藤井中尉はその前にうずくまり、優しくさするように白い肌についた砂を払い、そして呻くように泣いていた。

葬式は、軍の幹部と、家族と隣り組だけで済まされた。教え子たちの参列は禁じられ一人の姿もなかった。涙を誘うこの悲惨な事件に、各社の新聞記者も飛びついた。しかし、軍と政府の通告によって報道が差し止められ、記事はいっさい新聞にもラジオにも出なかった。

藤井中尉はこの事件の直後、三度目の特攻志願を行った。今度は自らの小指を切り、血書嘆願であった。今度ばかりは軍も諸般の事情から志願を受理した。すでに誰もが、藤井には死しかないと理解できていた。藤井中尉を特攻隊員として異例の任命を行ったのである。

藤井中尉は熊谷飛行学校で生徒達に大変人気があった。教えは厳しいが熱血漢で情に厚いということで、生徒達は藤井中尉を信頼し、尊敬し、あこがれを持っていた。藤井中尉の送別会では、学校の幹部や生徒達で集めたお金で軍刀を贈った。藤井中尉は大変喜んでいて。藤井はにこやかに、その軍刀を抜くと「これで奴らを一人残らず叩き切ってやるっ！」と刀を高くかざした。藤井の笑顔に、みんなも笑顔で答えた。

事件のことは藤井も話さず、誰も口にするものはいなかった。しかし、全員すでに知っており、藤井を惜しみ、藤井の心を分かって流す涙がさらに深く辛いものであったことは間違いない。

藤井は熊谷飛行学校を去る時、中隊長室に生徒を一人一人呼び、家族のことや思い出話を聞いた。そして、最後には「これからの日本を頼むぞ」と言って、若い教え子たちを励まし特攻隊の訓練地へと旅立った。

娘への手紙

藤井中尉は三人の葬式が終わった後、長女の一子ちゃんあてに手紙を書いた。一枚目は桜の花の絵、二枚目は子犬と蝶と共に戯れている幼子の絵の便箋である。

冷え十二月の風の吹き飛ぶ日 荒川の河原の露と消し命。

母とともに殉国の血に燃ゆる父の意志に添って、一足先に父に殉じた哀れにも悲しい、然も笑っている如く喜んで、母とともに消え去った命がいとほしい。

父も近くお前たちの後を追って行けることだろう。

嫌がらずに今度は父の暖かい懷で、だっこしてねんねしようね。

それまで泣かずに待っていてください。

千恵子ちゃんが泣いたら、よくお守りしなさい。

ではしばらく左様なら。

父ちゃんは戦地で立派な手柄を立ててお土産にして参ります。

では、一子ちゃんも、千恵子ちゃんも、それまで待ってて頂戴。

藤井中尉は、昭和 20 年 5 月 27 日、陸軍特別攻撃隊 第 4 5 振武隊快心隊の隊長として知覧飛行場に進出。翌 5 月 28 日、まだ夜も明けきらぬ早朝、隊員 10 名と共に沖縄に向けて出撃した。

「われ突入する」の電信を最後に、還らぬ人となりました。

藤井中尉は小川彰少尉の操縦する二式双発襲撃機に通信員として搭乗し、沖縄でレーダー哨戒任務だった米駆逐艦ドレクスラーに命中。

教え子達、そして愛する家族との約束をやっと果たすことが出来たのである。

死後、二階級特進にて少佐となる。享年 29 歳。

(引用、参考：「特攻の町知覧」、昭和史の証言 (2)「特攻散華」)

寺岡先生のお話を聴き、心が熱くなり、魂が震えました。天皇陛下の祈り、先人の志。そして後世に託した思い。そんな思いがつながって、今の日本がある。そう強く感じる事ができました。自分 1 人だけが苦しいと思ってしまう自分がある。自分 1 人だけが頑張っていると思ってしまう自分がある。でも、その裏側で多くの方が支え、応援し、期待をされていると感じることができた 1 時間半でした。その支援、応援、期待をされているのは、身近な家族や同僚も含まれますが、天皇陛下や先人の方々に他なりません。そういった方々の志を示していただき、腰骨が立つ思いでお話を聞かせていただきました。寺岡先生の後に復唱させていただいた言葉 1 つ 1 つに大きな意味があると感じています。この意味を今の自分に照らし返して、今からの行動を変えていく道しるべを示していただいたように思います。



7. 閉講式

2日間の講習を終え、全員が今の自分にできることを胸に誓い、閉講式を迎えました。各会代表のスピーチを聞きながら、その誓いをより強いものにすることもできました。

最後に武田先生からお言葉をいただきました。この2日間、体調がすぐれない中でも、私たちのことを思い、私たちのために無理を押して講習を進めていただきました。発熱されているということから自ら言われるまで微塵も感じさせず、言われた後も笑顔でまわりに心配させない雰囲気を作られていました。「精神が肉体を超える」と言いますが、間近でその様子を見させていただきました。その武田先生から最後にいただいた言葉が印象的でした。

明日を思う人は花を育てましょう

十年を思う人は木を育てましょう

百年を思う人は人を育てましょう

私たちは、すぐに花を見たいと思ってしまいます。でもそれでは明日しか思っていない。人を育てるには、百年先を感じるとともに、百年前も感じられるようにならなければならない。今回、池間先生や寺岡先生から先人の日本人について多くを教えていただいたことがこの言葉でまとめられました。

中山靖雄先生のお言葉「花のほほえみ 根のいのり」の言葉と合わせて、胸にしっかり焼き付け、伊勢の地を後にしました。また来年、成長した姿で「ただいま」と再会できることを楽しみにしております。2日間、ありがとうございました。

